

# フォークナーの『響きと怒り』に於ける 空間的・時間的閉塞

濱 西 和 子

## はじめに

この小説は四つの章で構成され、各々の章の初めには日付けが記されている。この題材はシェークスピアの『マクベス』(注1) から引用されたと言われているとおり、この小説の冒頭は白痴ベンジーの意味不明なわめきから始まる。この白痴ベンジーの感覚的に捉える世界が、まるでカメラ・アイのように、この白痴の目に撮るものが次から次に展開されていく。それは読者を迷宮に落ちいらせ、この白痴の独白(モノローグ)により、この33才のベンジーが、突然13才の頃に戻ったり、彼の愛する姉キャディーの描写から、その娘であるクウェンティンの物語に何度もフラッシュバックされていく。

小説の年代的順序(クロノロジカル)な面は全く無視され、脈絡なく分断されたり、時間が突如、逆戻りして読者は一層混乱する。また登場人物の系図や背景が、この小説の四章の客観的な説明部分になるまで明確にならない。それ故、どのページから読み初めてもあまり支障なく、同じようなリズムで淡々と語られ、ドラマチックなストーリー展開もなく、しかも幾重にも話しが過去と現在の間を行きつ戻りつしながら持続していく。

それに加え、南部の黒人達の使用していた言語が、外国人としてオーソドックスな英語を学んで来たものにとっては難解で、省略、脱字が多い。例えば“Course I is” Dilsey said. (P. 10) などの文章であり、我々は慣れない文体から、言語が本来固有する柔軟さや、響きや、生き物としてのしなやかさを感じることなく、読者と言語と作品との一体感到達することは容易でない。この白痴のモノローグに戸惑いつつ、霧の中を手探りで読み進んでいく間に、文章の様々な箇所がちりばめられた鍵(キー)を読者は見落としていることに気付く余裕もない。これはフォークナーの意図的に選択した技巧上のトリックなのであろうか。この謎のキーが、登場人物達の人生に深い象徴として関わっていたことに読者は後になってから気付かされる。この蜘蛛の巣とした白痴の独白の中にも理知的に制御する作家フォークナーの卓越した峻悦さに読者は翻弄される思いがするばかりである。

また、フォークナーは小説上の架空の町である、ヨクナパトーファ群、ジェファースンという閉鎖された空間を何故に設定したのであろうか。この南部の閉鎖された舞台空間で展開される暴力、近親相姦の妄想、性的墮落などの退廃的な様相は、時代の円周にうまく乗れない人々を、どんどんその円周上から振り落としていき、闘争、衝突、憎悪などの感情の爆発が、内へ内へと、

この破壊エネルギーの力学に操られて高まっていく。

それは白痴の叫びに呼応して、南部の取り残され、忘れ去られた人々の現実に対する叫びや怒りが、この限られた空間のなかで空しい「から騒ぎ」のように響くのである。

## 1. アメリカ南部

アメリカ南部は、北部人にとっては異国であり、産業や工業化から取り残され忘れ去られた場所なのだ。この時代の進歩の波に乗りおくれた南部にとって、未来への展望の道は閉ざされ、回歸するのは、南部の没落する旧家の威厳とその重荷の重圧を背負ったままで、過去の追憶と過去への逃避である。過去と現実が不思議に交差し、絡み合うフォークナー独自の文学世界こそ、アメリカ南部社会の特異性であり現実でもある。

フォークナーは『サートリス』で初めて、小説上の架空の町である、ヨクナパトーファ群、ジェファースンを作品の舞台として設定し、バルザックの「人間喜劇」のように登場人物を円環的に彼の作品に登場させる、一連のヨクナパトーファ・サーガとよばれる作品を書き上げた。過去の因果が現実には強い影響の影をおとし、南部の、その忘れられた空間に生きている人々の運命を翻弄する。これこそまさに作家フォークナーの熟知する南部独特の風土であり、そこにフォークナー独自の文学の場を設定し、没落する旧家族と、それに代わって台頭してくるスノープスの逞しい生存力を糧に、家柄がないのにもかかわらず南部社会の表層部にのし上がってくる一族と旧名家の没落と崩壊、この対比はきわめて重要な課題になっている。

しかし、この社会的要因の描写よりも、フォークナーが関心を抱いているのは、この限られた空間で、複雑に錯綜する人間の心理的、また生理的な人間の奥深く潜む、人間の本性を極限まで描写することこそ、作家の使命と考えているように思える。それ故に、冒頭では慣れない文体や言語のリズムも読み進んでいく間に、この小説には不可欠な要素であり、登場人物も、フォークナーが生まれ、育った土地であるからこそ創造することが出来た特異性のある人物像なのである。

## 2. コンブソン家の人々

父親は過去の名誉ばかりに固執したあげく、酒に溺れ現実に立ち向かう意欲を喪失している。また病気がちで不満と愚痴ばかりを述べるその妻コンブソン夫人は、一家の中で、より現実的なセンスをもつ次男のジェイソンを頼りにしている。

“Jason going to be rich man.” Versh said. “He holding his money all the time.” (P.36)

「ジェイソンは今に大金持になれるだ」とヴァーシュが言った。「年がら年中自分の金をにぎっとるだから」(P.38) このジェイソンは、時代の流れに乗ろうとして、綿花市場の投機に打ち込むが失敗し、その上、細々と貯えたお金を、憎き姉の娘のクエンティンに盗まれてしまう、自分の人生をことごとく破壊する、姉キャディに対する憎しみと怒りは、彼の中でクライマックスに達する。現実の世界で、どうあがいてもコンブソンの怨念がいつも彼にとりつき、求められない

ものに対する、ジェイソンの利己的な恨みは最後のところでいつも失敗し、ベンジーと同じく、ぶつぶつわめきながら、この小説舞台の上を走りまわり、自滅していく。

保守的で、一家の過去の栄誉の重圧に一番苦悩する長男クエンティンは、妹のキャディの純潔を尊ぶあまり、妹に対して近親相姦の妄想に囚われていく。後に学費として、一家の敷地をゴルフ場に売却したお金で、東部の名門大学に進学するがそこで自殺してしまう。

コンプソン家の禍いの根源となる、長女キャディは白痴ベンジーにとっては、いつも “She smelled like trees” (P. 9) 「木のにおいがする」、優しい姉だが、一家の崩壊を象徴するように、

“He went and pushed Caddy up into the tree to the first limb. We watched the muddy bottom of her drawers. Then we couldn't see her. We could hear the tree thrashing.” (p.39)

「キャディを木の最初の枝まで押し上げた。彼女のズロースの泥んこのお尻をわれわれは見つめていた。そのうち、彼女のすがたは見えなくなった。木がはげしくゆさぶられる音だけが聞こえた。」(P.42) この文章が象徴するように、大胆に勝ち気な性格で男と駆け落ちし、性的墮落に陥っていき、そのあげく、私生児の娘クエンティンを身ごもり、そのため性急に他の男性と結婚するが離婚させられる。彼女はコンプソン家の3人の男兄弟の誰にとっても、各々の意識の中で重要な位置を占めており、この小説では、キャディは常に円心の中心にいる主人公的な存在である。

次に三男の白痴ベンジーは、すでにこの旧家の過去の怨念を受けて生まれてきたように、生をうけたその時から、罪を背負って生まれてきた。“That boy conjure him.” “Hush your mouth.” Dilsey said. (P.32) 「“その子が魔法かけるだから” “静かにするだ” とディルシーが言った。」(P.34)

このようにベンジーは一家の重荷と呪いの対象として描かれている。最後にこの家の乳母であるディルシーは、コンプソン家の人々とは異なり、時代の変化に対しても超越的な適応性を示す。

コンプソン家の人々が、恐れを抱く時間の観念にも囚われず、コンプソン家の狂った時計から正しい時間を言い当てたり、また “Folks dont have no luck, changing names. My name been Dilsey since fore I could remember and it be Dilsey when they's long forgot me.” (P.58) 「名前かえたからちゅうて、人に縁起よくなるちゅうもんでもねえだ。おらの名前は物心もつかねえ時分からずっとディルシーだっただし、みんなにとくに忘れられちまう時分にだってやっぱしディルシーだろよ。」(P.63)

と断言する彼女は時間の流れに抵抗もせず、かつ妥協もしない強さはコンプソン家の人々には見られないものである。また, “I raised all of them and I reckon I can raise one more. Hush, now. Let him get to sleep if he will.” (P.31)

「あの子供たちあー一人余さずおらが育て上げてやっただ、だから、おら、もう一人ぐらい、

大丈夫育て上げられるだよ。さあ、黙るだ。この子が寝たいちゅうなら寝させてやるがええだ」  
(P.34)

コンプソン家の子供達、特に不具なベンジーや、親の愛情も知らない不遇な娘クエンティンには、ひとしきりの愛情を示す。

これらの登場人物は、ベンジーや長男クエンティンの独白で、各々人物の性格やイメージが語られながら描かれていくが、一章のベンジーの独白の部分でヒントとして提示された各々の人物の性格は、最後に各々の運命を決定するような要因となって展開していく。

### 3. 時間的閉塞

第二章はこの小説の主たるテーマである、「時」に関する観念から始まっている。

“It was Grandfather’s and when Father gave it to me he said I give you the mausoleum of all hope and desire; ..... I gave it to you not that you may remember time, but that you might forget it now and then for a moment and not spend all your breath trying to conquer it. Because no battle is ever won he said. They are not even fought. The field only reveals to man his own folly and despair, and victory is an illusion of philosophers and fools.” (p.76)

「それは祖父のものだったが、父がそれをぼくにくれるとき、こんな言葉を言った—クエンティン、わしはおまえにあらゆる希望と欲望の陵墓をやろう。..... わたしがそれをおまえにやるのは、おまえが時間を思い出せるためにではなくて、むしろ、おまえが時々はしばらくそれを忘れるようにつとめ、それを征服しようとして息急ききってしまうことのないようにとのためなのだ。というわけは、と彼は言った、どんな戦いも本当の意味で一度も勝たれたためしはなかったからだ。いや、戦われさえもしなかったのだ。戦場はただ人にその愚かさと絶望を見せつけるだけのものなんだし、勝利とは哲人や愚者の幻影以外の何物でもないからだ。」(P.81-82)

フォークナーの時間とは、サルトルによれば、「たとえば、プルーストにとっては、救いは時そのもののの中に、過去の完全な再現の中にあることを私は知っている。これに反してフォークナーにとっては—不幸にして—過去はけっして失われてはいない。過去はつねにそこに在る。それは執念なのだ。神秘的恍惚によってのみ、人は時間的世界から逃れ出る。神秘主義者とはつねに何ものかを、その自我を、もっと一般的に言えば、言語、あるいは比喩的表象を忘れようとしてい人である。フォークナーにとっては、時間を忘れることが必要なのだ。」(P.65 シチュアション1)

人間の不幸こそ、時間性をもつことであり、クエンティンが時計を壊すことは象徴的である。時計を破壊することによって、はじめて、彼は人間が創造したメカニクな「カチカチ刻む時」

というものを凌駕し、はじめて「時」を征服したという認識を持つ。しかしフォークナーにとっては未来がない、何物も未来に向かって進むものはない、ただ現在と過去の間を行きつ戻りつする破壊のメカニズムに巻き込まれて、むしろ過去に退行していくだけである。クエンティンの束の間の「時間性」からの解放も、我々にはその後の彼の運命が予測されてしまう。

クエンティンが、ある朝、目覚め、そして散歩をし始める、その回想をあたかも過去の回想のごとく語っていく時点から、我々に彼の自殺は暗示させられる。それに反して、プルーストの主人公たちは、淡々とあるがままに、自然な「時」の流れに逆らわず、とりたてて自らの行動を暗示することもなく、一種の惜別の念はあっても、フォークナーのように、暴力的に「時」の流れに対抗はしない。

同じく、サルトルは「響きと怒り」論の中で、フォークナーの時間について次のようにも論じている。「実をいえば、プルーストの小説手法は、フォークナーのと同じで在るべきだったであろう。それが彼の形而上学の論理的帰着点であった。ただフォークナーは首の回らなくなった人間である。そして彼が一か八かを試み、自分の考えを突きつめるのは、首の回らないのを感じるからである。プルーストは古典主義者であり、フランス人だ。フランス人というものは高利で産を破るが、かならずしまいには道を見い出すものだ。雄弁と、明晰な観念の趣味と、主知主義とが、せめて年代性の外観を保つことをプルーストに強いたのである。」(P.66 シチュアション1)

またサルトルは、「フォークナーはただ時の首を切り落として、時からその未来、すなわち行為と自由の次元をとり去った。」(P.66) (サルトル全集、シチュアション1) とのべているように、ヨーロッパ伝来の洗練された主知的な弄を駆使して構築した、形而上学的な世界ではなく、あくまでも彼の生まれた、アメリカ南部という空間に閉じ込められた未来をきりとり、過去の秩序、過去の風習にしか、戻りえない世界であることを、彼自身の素朴な感覚で本能的に理解していたものと思える。それがかえって、彼の作品にとっては、アメリカ南部の閉鎖された空間、時間性という観念が無視された、小説宇宙を創造しえたのではないだろうか。これこそ、ヨーロッパの作家達とは異なる、フォークナー独自の世界として、確立されたのだと断言できるのではないだろうか。

#### 4. 小説技法

この『響きと怒り』という作品で特筆すべきことは、南部の没落のテーマもさることながら、その画期的な小説技法だと言える。この小説技法で最も注目すべきは、一、二、三章で用いられている「意識の流れ」の手法である。

この小説の第一章は1928年4月7日で白痴ベンジーの独白で始まり、順序立っているわけではなく、難解で迷路に迷い込む。第二章は1910年6月2日の日付ではじまり、コンプソン家のクエンティンがハーバードの大学生で朝、寮で目を覚まし自殺するまでの彼の一日の行動と彼の過去形の回想がつづられていく。第三章は1928年の4月6日で一章の一日前日ジェイソンの行動がその意識を通して記述されており、最後の第四章は、1928年4月8日の朝から午後にかけて、コンプ

ソン家の日常の出来事が描かれている。この章では、他の章の「意識の流れ」の手法とは異なり、客観的な表現法になっていて他の章に比較して容易である。

この時点で日付けが転倒した構成の組み合わせに気付かされ、ここで初めて読者は時間的な背景がおぼろげながら少し理解できるようになる。

第一章は、言葉や正常な表現法をもたない白痴の独白ゆえに、むしろ感觸、匂い、色などを通して、印象主義的な表現で語られていく。第二章は、自殺寸前の異常な精神状態の青年の錯綜した精神を表わすために、表現主義的な文体が使用されており、第三章は、ジェイソンという、現実的なセンスを持つ次男によって語られていくので、話しは非常に簡単で具体的な描写になっていて明瞭な章である。ここで、フォークナーは可能な限りの実験を試みている。意識、無意識、潜在意識やフラッシュバックを明確に区別するために、普通の活字体とイタリック体とで表現したりしている。

The tree quit thrashing. We looked up into the still branches. "What you seeing." Frony whispered. *I saw them. Then I saw Caddy, with flowers in her hair, and a long veil like shining wind.* Caddy Caddy (P.39)

コンマもピリオドもなく単語の延々と続く羅列で、深層心理や潜在意識を表わそうと、あらゆる試みを駆使して、伝統的な小説技法に果敢な表現法を提示したところこそ、小説技法上で画期的なことであり、フォークナーの大きな実験と業績と言えるのではないだろうか。

## 結 論

白痴ベンジーの独白から始まったこの小説は、無尽蔵に何の脈絡もなくつづられていくように思えるが、実は作家フォークナーの論理的で理性的なコントロールが周到にはりめぐらされている。ベンジーの視覚に撮るものを忠実にたどりながら、この白痴ベンジーのモノローグをかりて、一人称のベンジーの語りを背後でフォークナーが巧みに操作し、言葉の意味も解らない白痴ベンジーの内面に作家自ら入り込み、白痴に独白させる形式をとりながら、客観的に、またリアルにコンプソン家の没落を、南部という空間の中で一家の没落の時間的経過をフラッシュバック式にたどりながら、登場人物の変容と墮落、また時代の激しい流れの円心力にそって生きられず、円周の外に投げ出された時代の迷い子の、南部の旧家の白人の人々の歴史を描いている。

フォークナーが生まれ、彼自身が一番熟知している、この閉鎖された南部という空間の中で黒人の言語を使いながら、この土地の人の声やリズムを伝え、南部の風土や情念や南部の人々に対する彼の愛着は、彼の想像した小説上の架空の町である、ヨクナパトーフア群、ジェファースンで見事に彼の小説芸術を完結させた。この閉塞的な空間の中を白痴のベンジーはわめきながら歩き廻り、また自分の姉の墮落のために、自分の人生を台無しにされたと怒り、呪うジェイソンの台詞（セリフ）はこの南部という舞台空間で空しく響きわたり空廻りする。

それに対してコンプソン一族の乳母である黒人のデルシーは、この一家に変わらぬ献身と慈愛

を注ぎ、時代の変化の怒涛に飲み込まれることもなく、常に安定した揺るぎない存在として、この一族の没落の動きに対して、対局的に静止する構図として描かれている。彼女の肌の感触、匂いの記憶など、旧家の幼い白人の子供達が母親不在で、これらの乳母に育てられた記憶と感受性は、原初的な記憶として常に主人公達の心のなかに再生してくる。ヨーロッパ伝統の形而上学的に卓越した小説技巧の作家達も、アメリカ南部の片隅に見事に開花したフォークナーの手法の巧みに驚愕したのは、彼のたぐいまれな抑制力と知性が、その作品の背後で支配していることであり、彼がヨーロッパ伝統の観念的な作家では決してなく、あくまでも人間に対する共感に基づいた、人間に対する深い洞察を伴い、フォークナー自身が生まれ、最も熟知した南部という舞台を設定し、そこで停止してしまった時間の中でうろたえ、迷える人々を描いた。それこそフォークナーが天性の物語作家と言われる由縁ではないだろうか。

**注) 1** シェークスピア：『マクベス』、(第5幕第5場)

“It is a tale. Told by an idiot, full of sound and the fury, signifying nothing”

「人生とは馬鹿者の語る物語だ。何の意味もなく響きと怒りに満ちている」

**参考文献**

- 1) 高橋正雄：フォークナー、テーマと研究(Ⅱ)、研究社、1968、3版発行
- 2) 平石貴樹：メランコリックデザイン、フォークナー初期作品の構想、南雲堂1993
- 3) 大橋健三郎：ウィリアム・フォークナー研究、南雲堂、1996
- 4) 加島祥造：フォークナーの町にて、1984
- 5) Daniel J. Singal：William Faulkner, The Making of a Modernist, The University of North Carolina Press, 1997
- 6) Cleanth Brooks：William Faulkner, First Encounters, Yale University Press, 1983
- 7) Cleanth Brooks：On the Prejudices, Predilections, and Firm Beliefs of William Faulkner, Louisiana State University Press, 1987

**引用文献**

- 1) William Faulkner：The Sound and the Fury, Vintage International, 1990
- 2) フォークナー全集 5 尾上政次訳、富山房、1969
- 3) サルトル全集 シチュアション1 人文書院、1965